

西山先生と曼珠沙華そして

「行動文化」

李代英勝

西山先生とその御学問を語るに、私はもとよりその任に耐える者ではないが、東京教育大学において、先生より親しく教えを受け、後年奇しくも同じ学園に先生をお迎えし、今また御退任をお見送りする由縁をもつ者として、ここにささやかな感懐を記させていただきたい。

「西山松之助先生年譜 著作目録」によれば、先生が『家元の研究』御完成のため執筆に明け

暮れておられた頃、私は文学部史学科（日本史学専攻）に入学した。担任は、木代修一先生と和歌森太郎先生であったが、入学後初の鎌倉史蹟見学には西山先生も引率して下さった。亡き和歌森先生と御一緒のその時の記念写真が、私の手元にある先生の御写真の最も古い一葉である。

昭和三十四年、十月二十五日、校倉書房より『家元の研究』限定出版五〇〇部を刊行（「年譜」）。こんにち、森岡清美先生によって（西山史学の頂点であると共に、豊かな水源でもある）『西山松之助著作集』第一巻「解説」とされる『家元の研究』の誕生であるが、私はその頃、偶々、小日向の先生の御宅にうかがっている。刷り上がったばかりの何冊かが御座敷に置かれ、日当りの良い縁側で、竹内誠先輩（現東京学芸大学教授）が大事そうに一冊一冊を点検している

ところで、私は先輩から、「これはすばらしい本だから買ひ給え」と勧められ、早速に入手させていただいた。のちに、〈限定出版のため再び世に出ない幻の名著〉になるとは思いもかけず、その時は奥付に、「限定五〇〇部ノ内二八四番」とある六二九頁もの大著の重みを手の内に感じるばかりであった。

その後さらに、私は大学卒業の日、その御本を持って御宅にうかがっている。先生は、表紙裏に、〈苦かりき遙かなる日の曇珠沙華〉と書いて下さった。その句意は、私にとって、長い病氣休学の末の卒業であっただけにひとしお身にしみるものであった。

在学中、西山ゼミでの学問の御指導はもとよりのこと、先生は、私を親身になって御心配下さり、私が、身勝手な甘えから失礼をも願みず

喪情を訴える手紙を差し上げると、長文の真情溢れる御返事で激励して下さることも再々であった。それは、まさに筆舌に尽し難いもので、私は先生より何ものにも替え難い尊い人間教育をいただけたと、常々その幸せをかみしめている。その証ともいふべきすばらしい宝物を、私は同じく卒業の日に先生からいただいた。先生は三枚の色紙をとり出され、さりげなく「好きなのを一枚選びなさい」といわれた。表に、加藤楸邨先生御自作御自筆の、「霧しぶく石をいできて蜂一つ 楸邨」の句に添えて、先生の描かれた二輪のりんどう、そして裏に、「月山の花 とうやくりんどう 一九六二年八月十一日 西山松之助」と記のある一枚を、私は選ばせていただいた。先生は早速裏に、「本代英勝君の卒業を祝して加藤楸邨氏との合作を記念に

謹呈す」と加筆して下さった。

楸邨先生は、『西山松之助著作集』第一巻の付録に、随想「茶杓と抵抗」を寄せられ、西山先生の史学はもとより、写生画、茶杓づくりに通底するへ火のような念力へをあげられ、それが、へ詮するところ消極的抵抗のパターンへであろう、と結んでおられる。私は、西山先生を熟知される楸邨先生ならではの御洞察と拝読し、お二人の入魂の色紙に改めて心打たれるばかりである。

卒業後しばらく私は、『家元の研究』を手にするたびに、先生にとつての曼珠沙華とは何であろうかと思ひめぐらすことがあった。丁度その頃、『朝日ジャーナル』に連載の始まった先生の随想「片隅の流転」に、私は寂寞とした世界を読みとつて、感動を綴った便りを差し上げ

た。私は当時、そうした寂寥の象徴としての曼珠沙華であると独り決めしていたのであったが、此度、古稀記念の『しぶらの里』を拝読し、改めて先生にとつての曼珠沙華の、さらに広く深い意味が納得される思いであった。小木新造氏が「解説」されているように、曼珠沙華（先生が「ふる里では「しぶら」は、〈華麗で情熱的な感じ〉が、いかにも先生のプロフィールにふさわしい花であり、しぶらの里での〈稀有な原体験〉が「西山史学の原点」であつてみれば、まさに先生のお人柄と学問を総合した象徴の花なのである。私はこの花の「華麗」、「情熱」に、さらに寂寥を秘めた研ぎ澄まされた「感性」を加えたいと思う。それは『しぶらの里』の先生御自筆の表紙装幀画にまぎれもなく表現されている。

この御本は、宮田登氏が「解説」される如く、〈近年いささかステロタイプ化した民俗報告書とくらべて、〈暁魂のこもった民俗誌〉であるばかりでなく、今後、『著作集』に集成体系化される西山文化史学を解明する上で欠くことのできない一書であると思ふ。私はさらに、同様な意味から、「敦煌茶杓巡礼記」（『日本常民文化紀要』第八輯Ⅰ）をあげたい。

私は、西山文化史学を解くキーワードの一つに、先生の名付けられた「行動文化」があると考えてるが、〈行動そのものが、宗教的世界への没入であつたり、花や月や雪の美の世界への陶醉であつたり、詩歌幻想の文化的詠嘆であつたりして建物や脚本や楽譜などとして、文化的に客観視できるものを残していないが、しかし、大衆の心を洗い清め、時に知的に、時には感覚

的にすぐれた美や閃きを人々に自覚させ、人間としての大きな感動を体験し感得しえたことにおいて、それは重要な文化的役割を果した」

『大江戸の文化』とされる「行動文化」のありようは、表相では理解できてもその真相においてとはとらえ難く、実践、追体験によってのみ、真に迫りものである。それはまさに、しづらの里での〈稀有な原体験〉をお持ちで、さらに〈火のやうな念力〉において諸芸に通じられた先生にして初めて可能なることであり、私はその見事なる実践を「敦煌茶杓巡礼記」にみる思いがする。

『しづらの里』が生まれる契機のひとつは、先生の中国旅行にあったと推察されるが（〈敦煌は大正時代の日本の村のようだと思え（略）〉とことな）く私の心のふる里のような気がしてならなかった）ほ

か、他方、中国旅行が先生の幼少時からの願望の実現であってみれば、『しづらの里』は、「敦煌茶杓巡礼記」を生む契機ともなっているというように、二作品は二にして一となり、西山文化史学を解く重要な鍵をなすものと私は、考えている。

私が成城に勤務して十年程経った頃、先生から突然、寒椿を薄墨で描いた画仙紙に、成城にこられることになった経緯と御心境を記されたおおどかな書の躍動する書翰をいただいた。やがて私は、先生の新しい研究室をお訪ねしたが、その折の先生の成城に対する第一印象は、研究室に沢山の書籍を運ばれたのが休日であったにも拘らず、職員の方が出迎えて終日手伝って下さったことに感激された、ということであった。

私はそこに、いつに変わらぬ先生の謙虚なお人柄をみる思いがして今なお鮮やかに憶えている。

それは、先頃の古稀祝宴での先生の御謝辞からも変わりなく窺われて、私は感銘深く拝聴した。

先生には、今後とも益々御壮健にて、祝宴で皆さんに御約束下さった「近世文化史の通史を、今世紀終わりまでかかり」書き上げていただきたく、心より念願するものである。(一九八二年

十月二十五日)